台大日本語文研究第 42 期
2021 年 12 月，頁 101-129
2021-09-15 收稿，2021-11-21 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202112_(42).0005

培養地方感為目標之語言文化通識課程教學實踐：以 USR 計畫台日連結實踐場域為例

伊藤佳代*

摘要

近年來，著重地方觀點為目標的 PBE (place-based education)成為教育基礎，台灣各大學紛紛進行教育部所謂 USR 計畫。此類計畫是以幫助地方活性化及地方人才培育為目的，促進大學與地方的連結，並由大學與當地居民共同致力解決地方所面臨之各種課題。該教育理念當中的一環，便是強調人們對場所的意義賦予、感情，又可稱之為「地方感(sense of place)」的培養。作者本身屬於校方 USR 計畫國際連結型參與者一員，在擔綱的台日語言文化通識課程中，作者嘗試基於 USR 主旨，以台灣高雄市前草地區及日本愛媛縣作為 USR 計畫實踐場域，目的在培養學習者對前草地區的地方感。因此，本研究的目的有二，其一是敘述該課程各種課堂活動的實踐情況；其二是究明學習者在地方感培育的情況。本研究所採研究方法有二，一是根據「地方連結量表」所為之量性調查；二是根據作業、訪談資料所為之質性調查。本研究經由此混合研究方法分析結果明顯得知：透過田野調查、高雄介紹簡報的製作、台日學生線上交流等各種課堂活動，可有助於提升學習者對該場域之地方感。此外，這也顯示對於該地域的地方感，將會往對該地域的社會責任育成方向發展而去。

關鍵詞：地方感、地方連結、USR 計畫、通識課程

* 國立中山大学西灣學院約聘助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The teaching practice of general language and culture courses aimed at cultivating a sense of place: An Example of the USR project Taiwan and Japan practice field

Kayo Ito*

Abstract

In response to the global trend of educational views that emphasize social responsibility and citizenship, educational innovation represented by the USR project is being implemented in higher education in Taiwan, and one of the educational principles is to foster sense of place is emphasized. Japanese education in Taiwan is also shifting to a view of language and culture education that emphasizes cultural communication and the growth of citizenship. In order to foster a sense of responsibility and citizenship that contributes to both Japan and Taiwan by making full use of language, the sense of place must be positioned as one of the educational goals. Therefore, in this research, in the Kaohsiung Qian-Cao area, which is the field of the USR project, fieldwork by intercultural collaborative learning, regional introduction Japanese presentation, online exchange. We analyzed the development of learners' sense of place using quantitative and qualitative research materials. As a result, it became clear that the learner's sense of place was formed, this also shows that the sense of place in the region will be developed in the direction of fostering social responsibility for the region.

Key words: sense of place, place bonding, USR project, general education

* Assistant Professor,Si-Wan College, National Sun Yat-sen University.

臺灣人學學術期刊資料庫

センス・オブ・プレイスの育成を目指した言語文化通識課程の教学実践:USR プロジェクト台日連結の実践フィールドを例に

伊藤佳代*

要旨

社会責任や市民性を重視する教育観の世界的趨勢を受けて、台湾の大学では、USR プロジェクトを代表とする教育革新が実施されており、その教育理念の一つとしてセンス・オブ・プレイス（sense of place）の育成が重視されている。地域問題を解決し、地域や社会の発展に貢献できる市民性を備える人材を育成するには、その前提として、地域に対する関心や愛着といった人と場所をつなぐ感情、すなわちセンス・オブ・プレイスが伴わなければならない。そこで本研究では筆者が参与する USR プロジェクト台日連結の実践フィールドである高雄市前鎮区草衙エリアについて、台日学生の異文化協働学習によるフィールドワーク、地域紹介日本語プレゼン制作、オンライン交流の活動を行い、place bonding scale を用いた量的資料および質的調査資料を用い学習者のセンス・オブ・プレイスの育成状況を分析した。その結果、学習者の前草エリアへのセンス・オブ・プレイスが形成されたことが明らかになった。また、その地域へのセンス・オブ・プレイスが地域に対する社会責任育成に発展していくことも示唆された。

キーワード：センス・オブ・プレイス、プレイス・ボンディング、USR プロジェクト、通識課程

* 国立中山大学西湾学院約聘助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

センス・オブ・プレイスの育成を目指した言語文化通識課程の教学実践:USR プロジェクト台日連結の実践フィールドを例に

伊藤佳代

一、序論

グローバル化に伴い、地域に根差した教育(place-based education、PBE)[1]やSDGsの理念を基盤とした教育方針が世界的主流となってから、批判性思考、問題解決、多元文化コミュニケーション、協働、創造性などの21世型スキルに加え、持続可能な社会を創造する市民としての自覚や社会責任といった市民性の育成が、国際的なコンピテシーとして重視されている（OECD 2018）。それに伴い世界の外国語教育政策において、EU（CEFR）が提唱する複言語主義（plurilingualism）および複文化主義（pluriculturalism）[2]を基盤とする言語文化の多様性の尊重、学習者の社会参画と市民リテラシーの育成を中心とする言語文化教育観へと転換している。すなわち世界全体の教育観が技術の能力の習得よりも、むしろそれらの技術能力を使って何をするか、如何に社会に貢献し、地域や国際社会を持続可能な発展に繋げていくかという社会責任感や市民性といった人間性の育成が、学問領域を超えた共通教育目標として強く認識されるようになったのである。

さて、こうした世界の教育観が新たなフェーズに入り、日本語教

[1] 地域に根ざした教育、いわゆる PBE は、学習者が地域に入り、実践や経験を通して場所や地域とのつながりを実感し、課題発見・解決のために必要な能力を育成しながら地域社会の質を高め、持続可能な社会実現に貢献する教育法である（櫃本真美代・猪口綾奈 2014）。

[2] Council of Europe (2001)によると、複言語・複文化主義の言語文化教育観は、個人の言語文化体験に着目し、個々人が備える母語を含む複数の言語能力が相互補完的な関係であるとした上で、その複数言語をレベルの高低問わず必要に応じて使える複言語能力の育成と、社会的エージェントとしての学習者の主体的な社会参画、言語文化の多様性の尊重、民主的な市民性の育成を目指すものである。

臺灣大學學術期刊論文

育においても、従来の文法構造理解中心型の授業から多元文化コミュニケーションと市民性の伸長という言語教育観へと移行している（オードリーオスラー、小玉重夫、細川英雄、福島青史 2019）。それに伴い台湾の高等教育においても学習者の社会参画を通じた社会責任・市民性の育成を目指す様々な教育改革が行われており、その代表的な例として、2017年より実施されている「教育部推動大専校院社会責任実践計画[3]（University Social Responsibility project、以下USRプロジェクト）」が主な取り組みの一つとして挙げられる。

さて、こうした地域社会をテーマに実践を行うPBEやUSRプロジェクトでは、学習者のセンス・オブ・プレイス（sense of place）の形成が強調されている[4]（高野孝子 2013、周芳怡 2019）。センス・オブ・プレイスとは、場所に対する意味付けや感情のことである。例えばUSRプロジェクトでは、地域経済・文化・教育等資源の不足、若者の都市部への人口流出などの問題を抱えた地域が選定される。そしてこのような地域は、地域の価値がいまだ掘り起こされていない場所であったり、あるいはそもそも存在すら認識されていない場所であったりすることが多い。こうした地域の持続的発展に貢献し社会責任や市民性を備える次世代の人材を育成するためには、まずその場所の存在に気づき、その場所への関心、愛着といった人と地域を有機的に結び付ける感情、すなわちセンス・オブ・プレイスが前提として伴わなければならないのである。

翻って台湾高等教育における日本語教育においても、PBEや複言語･複文化主義の教育基盤としたカリキュラム改革が行われており、台湾の地域文化を含めたテーマとした新たな日本語クラスの実践が

[3] USRプロジェクトでは、大学所在地や近隣地域を実践フィールドとして、他学部や他大学と連携した学際的チームにより、大学生や教員に入り、地域住民とともに経済・環境・教育など地域の様々な課題解決に取り組み、持続的可能な地域社会の創造及び地域に資する人材育成を目指すもので、各大学で地域の特色を活かした活動が行われている。

[4] USRプロジェクトでは、センス・オブ・プレイス（sense of place）、問題解決（problem solving）と協働学習（collaborative learning）の形成が教育理念として強調されている(周芳怡 2019)。

臺灣大專書籍期刊資料庫

行われている[5]。しかしながらこれらのクラスで取り挙げられる地域とは、主に文化や経済的資源が豊富で、人々の認知や意味付けがすでに形成されている観光地や地方都市中心部が多く、また、教育目標も専ら地域に関する知識理解や日本語能力の伸長に置かれており、センス・オブ・プレイスの育成を目標に据えた日本語文化関連クラスの例はまだほとんどみられない。しかしながら、学習者が社会的エージェントとして「対話による合意形成、言葉による自己表現、動機の具現化」を実践し、「言葉を使って社会で活動する個人になる /それをつくる」（オードリーオスラー、小玉重夫等、2019）ためには、やはり自らが関わる地域や社会に対する関心や意味付けを伴わずしては成しえない。そのため、センス・オブ・プレイスは市民性の育成を観点とした言語文化教育においても、重要な教育目標として位置付けていかねばならないだろう。

一方で、幅広い分野を横断的に学び、教養を身につけることを重視する通識教育の重要性が再認識されている昨今において[6]、日本語教育と通識教育との融合によって新しい日本語クラスを模索しようとする動きが見られている（羅素娟 2011、2017、林珠雪 2018、2020、落合由治 2020）。このような背景に鑑み、筆者はセンス・オブ・プレイスの育成を目指した新たな言語文化クラスを提案すべく、自身が参与している USR プロジェクト[7]の実践フィールドである高雄市前鎮区草衙エリア（以下前草エリア）および愛媛県をテーマに、台

5 例えば、2014-2019 年の教育部「多国語言與文化連結創新課程」、2015-2018 年の「基礎語文及多元文化能力培育計画」がある。

6 近年台湾の大学の通識教育の重視により、多分野を横断的に学ぶ学部共通通識課程を開設し、独自の学生が在籍するが増えてきた。例えば国立清華大学の清華学院や筆者が所属する国立中山大学西湾学院は、もと通識教育中心が独立し学院レベルに昇格した例である。

7 国立中山大学西湾学院 USR 国際連結類萌芽型プロジェクト「教育知識在地化與実践場域全球化：由高雄旧港新湾出発」では、「ローカルの「知」をグローバルに共有する」をテーマに、地域の「知」を掘り起こし、台日国際連携を通じてグローバルに共有し、1.大学と地域をカリキュラム改革、理論と実践の統合、2.地域文化的価値の発見と住民や地域貢献者の地域アイデンティティ育成、3.地域振興と人文教育、の三つの教育課題を設定し、台日両地域の地域課題の共有と相互理解を目的とした文化教育活動を授業に組み入れ、学生の地域社会参加と学部カリキュラム改革を実践している。

臺灣大學 日本語文學系

日両地域へのセンス・オブ・プレイスの育成を目的とした言語文化通識課程を開講することにしたのである。本研究では、台日異文化協働学習によるフィールドワークや台日オンライン交流等の活動を通じたクラス活動状況を述べるとともに、クラス活動を通して学習者のセンス・オブ・プレイスは形成されたのか、また、そのセンス・オブ・プレイスは学習者の社会責任を育成するのか否かを考察し、新たな日本語文化課程カリキュラムの提案を試みる。本論文は、1.先行研究、2.クラスデザインと活動実践状況、3.分析及び考察の三部より構成される。

二、先行研究

（一）センス・オブ・プレイスの概念

センス・オブ・プレイスとは、居住者や来訪者など人々がある場所や空間に対して抱く感情や意味づけのことで、Relph （1976）やTuan（1977）により提唱された概念である。場所（place）は物理的な空間を表すとともに、主観的な心理的空間をも表すことから、センス・オブ・プレイスの定義は広く、現象、感情、信念、態度、行為、考え方やライフスタイルなど、あらゆる人と場所の関係を表すものである（林嘉男・許毅璿　2007：46）。

センス・オブ・プレイスの研究は1990年頃から関連概念であるプレイス・ボンディング（place bonding）、プレイス・アタッチメント（place attachment）、プレイス・アイデンティティ（place identity）などの下位概念を中心に、環境心理学、人文地理学、そして地域をテーマにしたPBEなどの分野で盛んとなり（陳全栄・劉涤璐 2018）、2010年以降台湾や日本では地方創生を主軸とする地域政策が実施されたことで、地域観光学での研究が活発に行われている[8]。それによると、センス・オブ・プレイスは地域経済の発展、地域文化アイデンティティ形成の促進など、地域の持続的発展に有益であること

[8] 例えば西本章宏（2012、2013）や佐藤善信・辻村謙一（2019）、李宗鴻（2019）などがある。

臺灣大學學術期刊資料庫

が明らかにされている。

（二）センス・オブ・プレイスの形成要因

センス・オブ・プレイスの形成要因については、場所への来訪（Williams, Patterson, Roggenbuck, and Watson 1992）、交通アクセスの利便性（Williams and Vaske 2003：西本章宏 2012、2013）、居住期間や場所の精通度(Kaltenborn 1998：張玉蓮・潘朝陽 2014) がある。また現地住民とのふれあい、会話、活動等の人的交流の経験は地元文化の理解を深め、地域の愛着という感情を生み出し、その結果再訪を促す（徐巧恩 2018：蘇淑慧 2020)。

その一方で、来訪を伴わない場所でもセンス・オブ・プレイスを形成することができることを、多くの研究が示している。Jones, Patterson and Hammitt（2000）：Stedman（2002）：Hammitt, Backlund, and Bixler (2006)の研究によると、場所に対する感情は、場所との直接的な接触ではなく、「イメージ」との心理的接触、つまりその場所に関する情報と、類似した場所での過去の経験が新たな場所に投影されることで生じるという。これに関して鄭佳昆・郭蕙瑜（2014）の研究では、来訪を伴わない場所への心理的連結感は、生まれ育った故郷に似た景観に対して、より強く連結感を感じることが明らかにされている。そして、場所の感情は過去の経験だけでなく、未来において経験するだろう場所との比較を通しても形成される（Shumaker, Taylor 1983)。さらに、人々の場所に対する意味付けは、ポジティブな感情だけでなく、ネガティブな感情と経験からも発展する(Manzo 2005)。以上をまとめると、センス・オブ・プレイスは、場所への精通度、居住期間、アクセスの利便性、場所への来訪による物理的環境との身体的接触によって形成されるだけでなく、来訪を伴わない場所でも、場所に関する情報の摂取、過去／未来において来訪した／するだろう類似した場所での経験や、場所に対するポジティブ／ネガティブなイメージや感情により形成が促されるのである。

これらの先行研究は、センス・オブ・プレイスの育成を目指すク

臺灣大學學術期刊資料庫

ラス活動をデザインする上で、有益なヒントを与えてくれる。例えば、フィールドワークによる来訪と地域住民との交流機会の提供、あるいはその場所に来訪できない場合には、その地域に関する資料閲読、映像鑑賞、地域の人々とのオンライン交流なども、センス・オブ・プレイスの形成を促す活動として考えられる。また本研究で取り上げる言語文化通識クラスでは、USR プロジェクトの実践フィールドである高雄市前草エリアと愛媛県であり、これらは共に港町で漁業が盛んであるという共通条件を持っている。つまり二つの類似する場所に関するクラス活動を通じた比較を通して、両地域のセンス・オブ・プレイスの強化を促すことが期待できるのである。

（三）センス・オブ・プレイスの評価

さて、こうした場所への感情であるセンス・オブ・プレイスを量的評価するツールとして、Hammitt 等（2006）は「プレイス・ボンディング（place bonding）」の概念を応用した評価ツールを開発している。センス・オブ・プレイスの下位概念であるプレイス・ボンディングは、人がある特定の場所に抱く好意的な心理的連結を指す（Jones 等 2000）。プレイス・ボンディングは、ある景観に対する個人的な視覚的嗜好に関する視覚的視点と、社会的経験を通した情動的なつながり（emotional bonds）の二つの観点から、以下の 5 つの側面に分けられる。

1. 場所への精通度（place familiarity）
   場所での経験を通じ人と場所が関連付けられて生じる地理的、心理的な親しみやすさや、その場所での幸せな記憶、成功体験などの認知的意味づけ、および環境イメージなどを指す（Roberts 1996：Stedman 2003a）。
2. 場所への帰属感（place belongingness）
   物理的環境および社会的環境への相互作用によって生じる感情で、人々が特定の場所で活動を行う時に感じる場所との一体感・帰属感を指す（Hammitt 等 2006）。
3. プレイス・アイデンティティ（place identity）

臺灣大學學術期刊資料庫

個人の人生の意義や目的を獲得する人と場所との関係から生まれる一種の愛着で、その場所の象徴的重要性を表す概念である（Giuliani & Feldman 1993：Shamai 1991：Williams & Roggenbuck 1989）。家族、民族、教育、性別、職業など異なる経験が自己アイデンティティを形成することから、プレイス・アイデンティティは自己アイデンティティの下位概念とされ、場所への感情と価値観、思考、態度などの心理的要因の影響を受けた個人の物理的環境の認識により、特別な場所という帰属意識が生まれる（Proshansky, Fabian, & Kaminoff 1983）。

4. プレイス・ディペンデンス（place dependence）
ユーザーが必要とする特別な機能を満たし、特定の目標達成を可能にする機能的依存のことで、例えば釣りや登山など、その場所がユーザーに提供できる特別な機能を指す。プレイス・ディペンデンスに影響を与える要素は、主に環境によって提供される機能であり、その程度はその場所の環境がユーザーの行動にどの程度役立つかに基づいて決定される（Hammitt 等 2006）。

5. 場所への根付き（place rootedness）
長期間ある特定の場所と関わる中で生じる安心感や心地よさで、その場所の風景などが自分の家のような身近なものとして、ほかの場所にはない特別かつ強固な情意的連結を指す（1980）。

（四）センス・オブ・プレイス育成の教学実践研究

センス・オブ・プレイス育成を目標とした研究には、Semken & Freeman（2008）のアリゾナの地学クラス活動の研究があり、Place bonding scale を用いたプレ・ポストテストにより学習者のセンス・オブ・プレイスの伸長を客観的に測定している。

台湾におけるセンス・オブ・プレイス育成の研究については初等中等教育での実践研究が多く、例えば、中学校の核心素養を中心概

臺灣人學學術期刊資料庫

念とした地理教育において、ゲームやフィールドワークを用いたセンス・オブ・プレイスの育成の教学実践（王人禎 2019)、小学校地理教育での Google 映像を用いた苗栗銅鑼の写真資料収集活動の教学実践（陳哲銘 2013)、小学校の環境教育での藍染体験を通じたセンス・オブ・プレイス育成の教学実践（呂采玲 2017)、持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development,ESD）としての南投環境ガイド活動を通した高校生のセンス・オブ・プレイス形成の実践研究（鄧伊棋 2021)、中学英語クラスにおけるふるさと英語紹介の教学実践の研究（許庭瑋 2020）がある。また大学での実践では陳偉仁（2016）の研究があり、それによるとデザイン思考を応用したビデオ制作活動を通してセンス・オブ・プレイスだけでなく、創造力や想像力の伸長も促されたことが報告されている。

日本では地域アイデンティティをキーワードとする教育研究が行われている。例えば服部泰（2020）の研究では、「観光学実習」の実習参加者が石川県伝統的祭礼への参画により地域アイデンティティの形成や主体的活動の発現が見られたこと、そのほか新井克弥（2017）の郷土かるたを用いた地域アイデンティティ形成教育の研究報告、菊池八穂子（2017）の小学生社会科の地域学習を通じた地域アイデンティティの実践研究などがある。これらの先行研究により、適切にデザインされたクラス活動は、学習者のセンス・オブ・プレイスやそれに関連した能力を形成させることができることを示している。しかしながら、これらの先行研究の多くが初等中等教育であり、高等教育や言語文化クラスでの実践研究は少なく、今後の研究が待たれるところである。

三、研究方法

本研究では量的および質的の二つのアプローチを用いてデータ収集及び分析を行う混合研究法を採用する。それにより、研究課題の理解を高めるとともに、より詳細かつ立体的に現象をとらえることができる（Creswell & Clark, 2011）。

臺灣人學學術期刊資料庫

（一）研究目的

本研究における対象課程は、国立中山大学西湾学院109-1（2020年9月～2021年1月）に開講した全学部共通跨院選修課程「台日文化比較研究」で、1回150分全18週の授業である。本課程の教育目標は本学院および本学院USRプロジェクトの教育理念に則し、1.異文化協働、言語能力等総合異文化コミュニケーション能力育成、2.前草エリアと愛媛県への理解とセンス・オブ・プレイスの育成の二点である。本研究では2.センス・オブ・プレイスの育成に焦点を当て、以下の研究目的を設定した。

1. 本課程のクラス活動を通して形成されたセンス・オブ・プレイスはいかなるものか。
2. センス・オブ・プレイスは社会責任の育成を促すか。

（二）研究対象者

本研究は 109-1（2020 年 9 月～2021 年 1 月）の履修者 1 年～4 年生の 23 名（台湾学生 13 名、日本学生 7 名、日台ハーフ 2 名、日中ハーフ 1 名）である。本校は日本語学科が設置されていないため学生はすべて日本語非主専攻で文学、政経、社会、経営マネジメントなどの学部に所属している学生である。台湾学生は独学、日本語学習機関、大学の第二外国語クラスで日本語学習経験があり、日本語レベルは N4 以上と設定し、授業一回目に日本語レベルチェックテストを行い N4 以上の学生を選抜した。一方日本学生は正規留学生 5 名、短期交換留学生 2 名で、いずれの学生も中国語で授業を受けているため、日常会話以上の中国語能力を備えている。日台ハーフのうちの一人と日中ハーフの学生は大学進学を機に台湾に渡り、日本人留学生として在籍している。もう一人の日台ハーフは台湾在住で台湾学生として在籍しているが、日本語はネイティブレベルであるため日本語レベルチェックテストは行っていない。

（三）研究範囲

本課程では、USR プロジェクト実践フィールドである高雄市前草エリアと愛媛県をテーマに取り上げたが、本研究では紙幅の関係上、

臺灣大學學術期刊資料庫

高雄市前草エリアについてのセンス・オブ・プレイスに限定し分析を行う。高雄港に隣接する前草エリアは、市中心から南に離れた前鎮区に位置する（図 1）。民国 60 年代の工業の発展とともに東アジア最大の貿易港となり、前草エリアは近隣より多くの労働者が移住したが、その後産業構造の変革により労働者が減少しかつての活気は失われている。近年前鎮区は大型商業施設が建設されるなど開発が進んでいるが、前草エリアは大型商業施設「夢時代」「大魯閣草衙道」がある開発地域から主要道路によって分断されているため、開発から取り残された形となり、地域の発展格差がますます広がり、地域住民の地域アイデンティティの欠如、若者の人口流出などの地域活力低下の課題を抱えている。こうした忘れ去られた場所に足を踏み入れて地元住民と共に地域の価値を掘り起こし、地域への愛着を形成することができれば、地元の若者はこの地に留まり、地域をつくる担い手となるかもしれない。また、愛媛県の高校生との台日交流で前草エリアを紹介すれば、国際的視野の育成や前草エリアへの来訪を促すことも期待できる。つまり本課程を通じて、教育および経済面の SDGs に対応する持続可能な経済的発展を伴う地域活性化に貢献できるのである。

図 1　前草エリア所在地（四角で囲われた部分）



臺灣大學學術期刊論文資料庫

（四）調査材料と分析方法

調査材料は 1. Place bonding scale 評価アンケート（量的）、2.各活動の学習シート、振り返りレポート（質的）、3. 個人期末レポート（質的）、4.教師教学活動記録（質的）の 4 種である。

量的資料は Hammitt, Backlund, and Bixler（2006）、Hammitt, W. E., Kyle, G. T., & Oh, C. O.（2009）の「Place bonding scale」を採用した。本研究では当スケールの 3 種モデルのうち、Hammitt, W. E., Kyle, G. T.,等(2009)妥当性およびロバスト性がみとめられた吝嗇性モデル（parsimonious model）を参考に質問項目を整理し、地名部分を前草エリア／愛媛県に差し替えた 2 パターンの 14 問からなる質問表を作成した。質問票は中国語表記であるが、本研究考察部分では日本語に訳して表記している。評価はリッカート尺度を採用し、1 点（まったく同意しない）から 5 点（非常に同意する）の 5 段階評価とし、第 2 週目と第 18 週目にプレ・ポストテストを実施した。分析・統計解析には IBM SPSS 24 中国語版を使用し、対応のある T 検定により分析した。

質的資料は、センス・オブ・プレイスの形成要因およびプレイス・ボンディングの先行研究を参考に、今回の研究対象者すべてが前草エリアへの来訪経験がないことを踏まえたうえで操作的定義（operational definition）を設定し（表 1)、資料内容をオープン・コーディング法により分析した。分析資料には調査材料、学生番号、国籍（台湾＝台、日本＝日、ハーフ＝ハ)、性別（男、女）を表示した。例えば「3-4-台-男」は、「3」は個人期末レポート、「4」は学生通し番号、「台-男」は台湾男性の意味である。

臺灣大學學術期刊資料庫

表 1　操作的定義（operational definition）

操作的定義	コーディングルール
1．場所への精通度	前草エリアのアクセス・地理・歴史などの情報、地理的・心理的親近感。
2．場所への帰属感	前草エリアで感じる場所との一体感。
3．プレイス・アイデンティティ	前草エリアへの愛着、関心。過去・未来でのポジティブ・ネガティブなイメージ。

（五）教学ストラテジー

本クラスは複言語・複文化主義の言語教育観を基盤として、総合的な異文化コミュニケーション能力と、地域理解を通したセンス・オブ・プレイスの育成という二つの学習目標を設定している。そのため、目標言語の運用能力と内容理解を同時に進める「内容言語統合型学習(Content and Language Integrated Learning,CLIL)[9]」を用い、学生の母語使用を排除せず日本語を主、中国語を補とする日中両言語使用とし、日本語学習とともに内容理解を深めることに重きを置いた。また普段日本人と接する機会が少ない台湾学生に日本学生との対面コミュニケーションの機会を提供するため、日台学生混合グループによる異文化協働学習(intercultural Collaborative learning)を用い、前述した先行研究を参考にクラス活動をデザインした。

（六）実施順序と方法

本課程では高雄市前草エリアと愛媛県の各地域への相互理解を深め、センス・オブ・プレイスを育成することをねらいとした 5 つの活動を実施した。活動テーマと内容詳細を表 2 に示す。

[9] 教科科目やテーマの内容(content)の学習と外国語(language)の学習を組み合わせた学習（指導）の総称である。CLIL は学習内容(content)の理解に重きを置き、学習者の思考や学習スキル(cognition)に焦点を当て、学習者のコミュニケーション能力(communication)の育成や、学習者の文化(culture)あるいは相互文化(Interculture)の意識を高めることが特徴である。

表 2　活動テーマと内容

活動テーマ	活動内容
活動 1:前草エリア/愛媛のイメージについてのグループ討論	プリントを配り、「前鎮草衙」「愛媛県」と聞いて連想することば、「前鎮草衙」「愛媛県」に対してのイメージについて日本語で書き、その後メンバーと答えをシェア、日本人と台湾人では同じ、または異なる意見があるか確認する。
活動 2:前草エリアフィールドワーク	本学部 USR プロジェクトで収集した前草エリア関連資料を閲読後、2020 年 9 月 24 日鎮南宮、銀座街市場、宏裕行花枝丸館、珍芳烏魚子見学工場を見学。
活動 3:フィールドワーク振り返り	フィールドワーク個人レポート提出。やったこと（Y)、わかったこと(W)、次やること(T)をグループで話し合い、ポスターに書いて発表する。
活動 4:前草エリアを含む高雄紹介日本語レポート制作	フィールドワークの振り返りをもとに、前草エリアを含めた高雄を紹介する日本語プレゼンテーションをグループごとに制作する。
活動 5:愛媛県の高校生とのオンライン交流	1 回目の交流では中山大学の学生が愛媛県の高校生に向け前草エリアを含む高雄を日本語で紹介、2 回目の交流では愛媛の高校生が愛媛県愛南町を英語で紹介する。

図 2　前草エリア/愛媛県のイメージについての討論

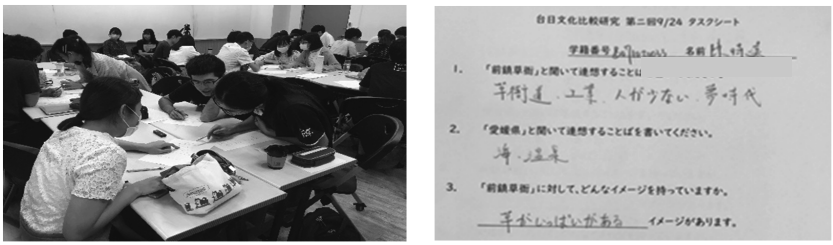
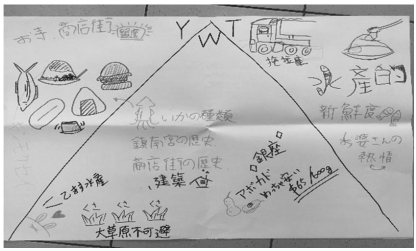


図 3　フィールドワーク（左）銀座街、（右）珍芳烏魚子見学工場



臺灣大學

図 4　前草フィールドワーク YWT 振り返り



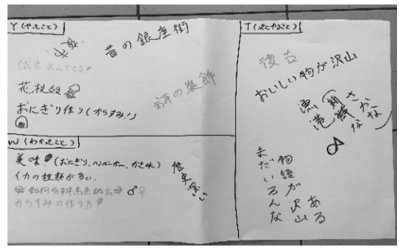


図 5　愛媛県の高校生とのオンライン交流





四、結果と考察

（一）量的資料の分析結果

本課程での活動の実施前後では、学習者の前草エリアに対するセンス・オブ・プレイスはどう変化したのだろうか。これについて、まず「Place bonding scale」の分析結果に基づき検討していく。表 3 のプレ平均値をみると、そのほとんどが 1~2 と非常に低い値である。これより授業開始時には前草エリアに対する心理的連結は非常に弱いといえるだろう。次にポスト平均値を見ると、2 以下がなくなり設問 4、5 では平均値が 4 まで上昇していることがわかる。次にプレおよびポストの平均値が統計的に有意な差があるかを見るため、対応のある T 検定の分析をおこなった。分析の結果、14 問中 12 問についての評価値で有意な差（$p<0.05$）が認められた。これより、フィールドワークで実際に来訪したことで、当地域の位置とアクセス方法、地域の生活の様子の理解、すなわち、場所への精通度が高められ、またそうした前草エリアの認識の深化が、場所への親しみやすさ、自分にとって特別な場所といった前草との情意的なつながり

臺灣人學學術期刊資料庫

を強めたことが明らかになった。

表 3　対応のある T 検定の結果（N=23）

	プレ平均値	ポスト平均値	t	自由度	有意確率（両側）
1. 前草のおよその様子を描くことができる	2.12	3.73	-8.38	25	0.000*
2. 前草に親しみを感じる	1.85	2.96	-5.136	25	0.000*
3. 前草に詳しい	1.81	2.85	-4.355	25	0.000*
4. 前草の地理位置を説明できる	2.46	4.00	-5.22	25	0.000*
5. 前草への交通アクセスを説明できる	2.69	4.00	-3.998	25	0.000*
6. 前草の生活や風土について理解している	1.77	3.23	-5.718	25	0.000*
7. 前草が好きだ	2.81	3.35	-2.273	25	0.032
8. 前草に入った時、この環境に溶け込むことができる	3.31	3.27	0.146	25	0.885
9. 前草とのつながりを感じる	2.54	3.00	-2.065	25	0.049
10. 前草は他の場所では得られない感覚を与えてくれる	2.58	3.19	-2.685	25	0.013
11. 前草は私にとって特別な場所だ	2.31	3.08	-2.606	25	0.015
12. 前草に愛着を感じる	2.19	2.5	-1.189	25	0.246
13. 前草は私にとって意義のある場所だ	2.15	2.73	-2.161	25	0.041
14. 前草に対するアイデンティティを強く感じる	2.04	2.88	-3.07	25	0.005*

（二）質的資料の分析結果

つぎに質的資料を操作的定義に従い分析した、前草エリアへのセンス・オブ・プレイス、およびセンス・オブ・プレイスから社会責任の育成についての結果を考察する。調査対象者の非母語による資料データは文法の間違いが散見されるが、大意理解は可能であり分

臺灣大學學術期刊資料庫

析に支障はないと判断したため、修正せずそのまま抜粋している。

1. センス・オブ・プレイスの形成

(1) 場所への精通度

a. 前草エリアのアクセス・地理的情報

活動 1 で行った前鎮草衙と聞いて連想することばを書かせた活動学習シートの記述によると、夢時代、大魯閣草衙道の商業地を記した学生が 17 名と多く、続いて工業、工場が 7 名、港、船が 4 名、中には前草の文字のイメージから「草原」と書いた学生もいた。そして、地元高雄出身の学生も含めすべての学生が前草エリアの存在すら知らなかった。学生曰く：

> 恥ずかしいですが、実は高雄人の私でも、今回行った全ての場所は全然聞いたことありませんでした。(1-20-台-女) 中山大学で勉強することは 4 年目になりましたけ(ママ)と、この間に前鎮と草衙に行ったことはない。(1-2-台-男)

そして学生たちはフィールドワークによって、商業地から道一本隔て前草エリアを、驚きと共に発見することになる。学生曰く：

> 驚いたことは、銀座街の後ろはなんと今大人気なデパートでした！その事実を発見した時びっくりしました。違和感が強すぎたから。(1-10-台-女) 在這次的參訪出發前，對於前鎮草衙一帶的地域其實我一丁點都不了解，甚至無法明確指出他在高雄的地理位置，一查後才發現：阿，原來就是夢時代前那一段路啊。(1-11-台-男)

b. 前草エリアの歴史・文化知識の習得

フィールドワークでは、地元の人々の生活の中心となっている商店街、寺廟、そして前鎮区の代表的産業である水産加工品工場を見学した。これにより当エリアの実際の様子、歴史文化や産業などの理解を深めることができた。学生曰く：

> 高雄に来て二年と少したつのですが、前鎮草衙の方に足を運んだことが有りませんでした。そのため、前鎮草衙で有名なイカ団子やカラスミなど様々な水産物が有名だと知るいい機会

臺灣大學圖書館館藏資訊

になりました。(2-12-ハ-男) 正直台湾に来てからは「高雄なんもないじゃん」とずっと感じていました。しかし、その考えは今回の授業を通して 180 度変わった気がします。「高雄にはこんな場所があるのか」「こんな歴史があるのか」そう感じました。

(1-17-日-男) 那個去前鎮，草衙踏查的事情讓我發現很多新的事情。因為我住在高雄已經半年多了，所以我本來覺得大部分的高雄事情，像是文化，歷史，交通什麼的，還有連名產品也都知道。可是，把那個踏查參加了以後，後來才知道在高雄還有很多我不知道的事情。(1-23-日-男)

また、グループ内の台日学生間やオンラインを通じた台日異文化協働学習活動でも、前草エリアへの理解を強化することができた。学生曰く：

透過與日本同學們的合作來推動我們台日雙方都更加了解高雄這個地方的發想我個人認為是相當好的。首先設立一個主題對於互相第一次見面的同學來說能夠有一個明確的話題，使我們在分組時也不至於到無話可說造成尷尬，而且我也確實學習到了關於前草這塊陌生土地的一些知識。(2-4-台-女) 在為了愛媛縣高中生作介紹高雄的簡報中，我也學到了許多以前不知道的台灣歷史、文化、特產等。(2-6-台-男)

c. 地理的・心理的親近感

今回のフィールドワークで実際に前草エリアに足を踏み入れ、地元住民とのふれあいを通じ、前草エリアをより深く身近に感じることができた。学生曰く：

実際に行くと、そこで働いているや暮らしている人達の生き方をとても深く感じました。(1-20-台-女) 因爲我本身是台北人，而且又是大一，所以一開始的前鎮草衙實地探查的活動讓我對學校的環境還有高雄有更近一步的了解，而且比起在教室裡查資料，實際去看過一次的成效真的比較好。(2-19-台-男)

臺灣大學學術期刊資料庫

(2) 場所への帰属感

フィールドワークでは前草エリアが心理的つながりを感じた学生もいた。学生曰く：

私もここの一員の感じがあふれ出した。(1-13-台-女)

(3) プレイス・アイデンティティ

a. 前草エリアへの愛着、関心

フィールドワークでの地元の人たちとの交流を通じて前草エリアへの関心、前草エリアが衰退していくことへの憂いなどの感情が生じた。学生曰く：

いちばの中で果物を売り(ママ)るおばあちゃんと少し話しました。話す間におばあちゃんも寂しい表情をしましてわたしも同じ気持ちになりました。いい文化なのにそのまま時間の流れでなくなるのはとても惜しいとわたしはそう思いました。(1-8-台-男) おじいちゃんとおばあちゃんたちはいつも親切な笑顔でお客様に話しかけました。特にバナナを売っていたおばあちゃんはよくおしゃべりだった。彼らとその後のスポットで出会い人たちも前鎮と草衙に(ママ)愛して、地方のために頑張っていましたことに、私は感動され(ママ)ました。(1-10-台-女)

b. 前草エリアに対するネガティブなイメージや感情

前草エリアに対して生じた感情はポジティブな感情だけではない。高雄出身の学生 10 は、過去における前草エリアへのイメージについてこう語っている。

前鎮と草衙がつまらないそうで、あのところへ行きたいという言葉を言うことなんで(ママ)全然できなかった。そして自然に、前草（前鎮と草衙）へ行った記憶が少なかった。(1-10-台-女)

しかし今回初めて前草エリアを訪れた後の振り返りで、前草エリアを積極的に理解しようとする心の変化がみられた。学生曰く：

今回の見学旅行をきっかけに、もっと前草のことを知って、土地に少し親しくなりたいです。(1-10-台-女)

日台ハーフの学生 12 は、活動 4 の高雄紹介プレゼン制作の際、紹

臺灣人學學術期刊資料庫

介スポットに前草エリアをいれるという条件があるにもかかわらず、学生 12 のグループは前草エリアを外し、隣接する大型娯楽施設を紹介スポットに入れていた。その理由についてたずねたところ、こう答えたのだった。

だってあそこには何もないじゃないですか。(4-12-ハ-男)

同じく学生 1 も、前草エリア紹介プレゼン活動を振り返りこう述べている。

有點不知道怎麼向日本同學介紹前草地區的魅力。(2-1-台-男)

これらの言葉から、前草エリアを発見し実際の様子や基本的情報については理解をしたものの、前草エリアの魅力や価値を見出すまでには至らず、「何もないところ」というネガティブなイメージでこの地域をとらえていることが察せられる。しかしながら、こうしたネガティブなイメージも、その場所と人とを心理的に結びつける意味付けの役割を果たしていると推測されるのである。

2. センス・オブ・プレイスから社会責任の萌芽へ

何もないところから新しい価値の創造し、魅力ある地域に生まれ変わらせるには、地域住民だけでなく、学生、社会人、観光客など地域に関心を持つあらゆる人が協力しあわねばならない。学生は、フィールドワークを通じて前草エリアの現状を目の当たりにし、前草エリアの地域問題に関心を寄せるとともに、自分たちはこの地域のために何ができるか、という地域に対する社会責任を萌芽させたのである。これよりセンス・オブ・プレイスが、社会責任という市民性の育成に結果としてつながっていくことが示唆されたのである。学生曰く:

> 今回のフィールドワークから見ると、実は前鎮草衙を私の予想ほど深い知ることが出来なかった。最初に言った地域発展の背後にあるストーリー性と地方文化や特色の繋がりはまだ弱い。興味を惹かれるようなものになるにはちょっと物足りないかなと思う。今後はこの部分について、もっと調べる必要があると私は考えています。(1-5-台-男)私たちはこのような街や地

臺灣人文學術期刊資料庫

区をどのように再生できるかを考えていくべきであると感じました。（略）もしかすると、このような素晴らしい歴史は受け継がれなくなるかもしれません。私たちにはまだ希望は残されております。どのように若者に興味を持ってもらうかを考え政府や地方民が力を合わせて皆がやるべきことと思います。（1-6-台-男） 從剛開始的實地勘察開始，我真正走入了來中山大學四年從沒有想去過的前鎮－草衙地區。真正體會到了文化的興衰，確實在回到學校以後心中有許多的感觸，也漸漸開始思考台灣各地這樣的地方有多少，自己又是否可以有能力幫上一些忙。(2-2-台-男)希望在未來可以花更多時間去探索台灣，去儲值真正的「臺灣價值」。（2-6-台-男）

五、結論

本研究では、USRプロジェクト台日連結の実践フィールドである高雄市前草エリアと愛媛県をテーマに、センス・オブ・プレイスの育成を目指した新たな言語文化通識課程の教学実践と、そのうちの高雄市前草エリアについてのセンス・オブ・プレイスの育成状況について考察を行った。研究分析の結果、クラス活動を通して学習者の前草エリアへのセンス・オブ・プレイスが形成されたことが明らかになった。また、その地域へのセンス・オブ・プレイスが地域に対する社会責任育成に発展していくことも示唆された。以上の研究結果により、日本語教育と通識教育、ローカルとグローバルを融合させた市民性育成を目指した新しいカリキュラムの一例を提示することができた。

グローバル化とローカル化が同時に進行する21世紀の今日において、持続可能な地域社会を創造するためには、そこに住む地域住民だけでなく、地域や国を超え、その地域に係るあらゆる人が共に連携して取り組む必要がある。特に台湾と日本の間では地方創生、USRプロジェクトなど地方関連の政策において非常に活発な交流が行わ

臺灣大學學術期刊資料庫

れており[10]、もはや双方の協力連携なくして日台それぞれの社会の発展は成しえない。今後はこうした日台双方の地域課題に取り組む人材育成を視野に入れて、言語能力や知識の習得のみならず、センス・オブ・プレイスを含めた市民性の育成も教育目標にしたカリキュラムを検討していくことが必要となっていくだろう。

今回はその初歩的な可能性を提示することができたが、しかしながら今回の教学実践ではいくつかの問題点も明らかになった。全授業終了後に行った学生インタビューでは、1 回だけのフィールドワークではその土地を理解するのには時間が短すぎるという声や、もっと日本について勉強したかったという声が聞かれた。また、カリキュラムデザインに関しては、台湾学生の日本語レベルの差が大きく活動内容のレベル設定が困難であること、学生によって言語学習を重視するか内容学習を重視するかが異なるため、言語／内容学習の配分の調整が難しいこと、日本学生の人数確保が困難などの問題点がある。今後はこうした反省点を踏まえ改善し、日本語教育と通識教育の融合したカリキュラムの発展に向けて、引き続き検討していきたい。また今回の授業でテーマとした扱った愛媛県へのセンス・オブ・プレイスについては本稿で論じることができなかった。これについては今後別稿にて論じることにする。最後に、本研究での教学実践が日本や台湾の言語や文化教育に携わる教育者の方々の、今後のクラス作りの参考になれば幸いである。

【付記】本研究は 2021 年 2 月 26 日「高知大学黒潮圏総合科学専攻/次世代地域創造センター日台連盟「地方創生」国際研究会～大学教育による地方創生の可能性～」での研究発表を大幅に加筆修正した

[10] 日本文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC、COC＋）」や地方創生は、台湾 USR プロジェクトに大きな影響を与えている。例えば科技部人文創新與社會實踐計畫では台日聯盟が設立され、台日大学間での学術交流活動が行われている。また、2019 年は台湾地方創生元年として、日本の経験を参考に各地で様々な取り組みが行われている。

臺灣大學圖書館版權所有

ものである。

【参考文献】

新井克弥（2017）「2017 年度研究助成報告郷土かるたを用いた地域アイデンティティ形成教育の可能性」『関東学院大学人文科学研究所報』42、p.21-30、関東学院大学人文科学研究所

王人禎（2019）『遊戲、地方與学習－一所国中地理課程核心素養教学実驗過程之民族誌』清華大学台湾研究教師在職進修碩士学位班学位論文

オードリーオスラー・小玉重夫・細川英雄・福島青史（2019）「市民性形成と言語文化教育－価値観の異なる多様な人たちと共に生きるために」『言語文化教育研究』17(0)、p.2-32、言語文化教育学会

落合由治（2020）「高等教育としての台湾日本語教育の探究ー専門性、公共性、未来性への模索ー」『台湾日語教育学報』35、p.112-139、台湾日語教育学会

菊池八穂子（2017）「当事者意識を育てる小学校社会科地域学習の単元開発 ―第 3 学年小単元「農家の仕事」を事例として―」『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』53（2）、p. 107-124、名古屋学院大学総合研究所

許庭瑋（2020）『「英」我們同在一起－ 融入地方感的国中英語教学之行動研究』台湾師範大学教育学系学位論文

佐藤善信・辻村謙一（2019）「プレイス・ブランディングに関する一考察：神戸タータンのケーススタディ・リサーチ」『ビジネス&アカウンティングレビュー』23、p. 61-78、関西学院大学

周芳怡（2019）「通識課程落実大学社会責任之行動研究」『通識学刊：理念與実務』7（1）、p.1-36、台湾通識教育策略聯盟暨品質策進会

徐巧恩（2018）『中國遊客対台湾的旅遊目的地、地方依恋與感知価値対重遊意願影響之研究』義守大学管理碩博士班学位論文

蘇淑慧（2020）『地方創生文化観光経済策略之探討—以布洛湾山月村渡假小屋為例』台湾師範大学高階経理人企業管理碩士在職専班

臺灣大學圖書館期刊資料庫

(EMBA)学位論文
高野孝子（2013）「地域に根ざした教育の概観と考察－環境教育と野外教育の接合領域として－」『環境教育』23（2）、27-37、一般社団法人日本環境教育学会
張玉蓮・潘朝陽（2014）「測絵文化襲產居民與遊客的地方感－以淡水為個案研究」『華岡地理学報』30、p. 37-58、中国文化大学地理学系
陳偉仁（2016）「「義」想不到，湾隆底「嘉」: 以設計思考建構大学生的創意地方感」『雲嘉特教期刊』23、26-35、国立嘉義大学特殊教育中心
陳全栄・劉涤璐（2018）「地方感研究文獻評析」『設計学研究』21(1)、p. 83-104、中原大学設計学院
陳哲銘（2013）「利用自願性地理資訊培養学童的地方感：從苗栗小学生得到的経験」『地理研究』59、p.75-90、国立台湾師範大学地理学系
鄭佳昆・郭蕙瑜（2014）「與未造訪過地点之地方連結発展探討」『地理学報』73、p.29-52、台湾大学地理環境資源学系
鄧伊棋（2021）『地方永続発展教育対高中生地方感之形塑—以南投高中環境解説隊為例』台湾師範大学環境教育研究所学位論文
西本章宏（2012）「プレイス・アタッチメント概念による地域ブランド・マネジメントの可能性 (1)-「小樽」: 観光マーケティングにおける地域ブランド価値の役割 -」『商学討究』63(2.3)、p.233-257、小樽商科大学経済研究所
西本章宏（2013）「プレイス・アタッチメント概念による地域ブランド・マネジメントの可能性 (2)-「小樽」: 観光マーケティングにおける地域ブランド価値の役割 -」『商学討究』63 (4)、p.65-81、小樽商科大学経済研究所
服部泰（2020）「地域アイデンティティの形成「観光文化研修」参加後の主体的活動について」『東海大学紀要観光学部』11 、p.33-39、東海大学

臺灣大學學術期刊資料庫

櫃本真美代・猪口綾奈（2014）「グローバリゼーション下における地域に根ざした教育の可能性について―「場」とつながるPBE（Place-Based Education）を参考に―」『Rikkyo ESD journal』2、p.22-25、立教大学

羅素娟（2011）「通識教育中日本文化課程的設計與実践－以培養跨文化能力為目標」『台湾日語教育学報』17、p.171-187、台湾日語教育学会

羅素娟（2017）「台湾における [日本文化] 授業の教育動向と課題について-日本語教育と日本研究と通識教育の接点を求めて」『台湾日語教育学報』28、p.353-376、台湾日語教育学会

李宗鴻（2019）「地方感與観光」『中国地理学会会刊』63、p.1-9、中国地理学会

林嘉男・許毅璿（2007）「人與環境関係之論述：厘清“地方感”、“地方依附”與“社区依附”在環境研究上的角色」『環境教育研究』5(1)、p.41-71、中華民国環境教育学会

林珠雪（2018）「領域間の提携と社会実践－農食育交流を中心に－」『多元文化交流』10、p.175-176、東海大学日本語文学系

林珠雪（2020）「高等教育における領域間の提携と実践－台日農食育交流の実践教育を中心に－」『多元文化交流』12、p.224-240、東海大学日本語文学系

呂采玲（2017）『特色課程対国小学童地方感形塑影響之研究―以台北市立湖山國民小学藍染特色課程為例』台湾師範大学環境教育研究所学位論文

Creswell, J. W., & Clark, V. L. (2011). The nature of mixed methods research. Designing and conducting mixed methods research (2nd ed., pp. 1-18). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

Council of Europe (2001). Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge, UK: CUP. [吉島茂・大理枝（訳・編）(2004) 外国語教育 II－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠、朝日出版社]

臺灣人學學術期刊資料庫

Giuliani, M. V. & Feldman, R. (1993). Place attachment in a developmental and cultural context, Journal of Environmental Psychology 13, p. 267–274.

OECD (2018).The future of education and skills Education 2030. https://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf.（2021.8.18 検索）

Proshansky, H. M., Fabian, A. K. & Kaminoff R. (1983).Place identity: the physical world and socialization of the self, Journal of Environmental Psychology 3, p. 57–83.

Hammitt, W. E., Backlund, E. A., & Bixler, R. D. (2006). Place bonding for recreation places: Conceptual and empirical development. Leisure studies, 25(1), p.17-41.

Hammitt, W. E., Kyle, G. T., & Oh, C. O. (2009).Comparison of place bonding models in recreation resource management. Journal of Leisure Research, 41(1), p.57-72.

Kaltenborn, B. P. (1998). Effects of sense of place on responses to environmental impacts:Astudy among residents in Svalbard in the Norwegian high Arctic. Applied Geography, 18, p.169-189.

Tuan, Y. F. (1977). Space and place: The perspective of experience. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Tuan, Y. F. (1980). Rootedness Versus Sense of Place. Landscape, 24 (1), p.3-8.

Relph, E. (1976). Place and placelessness, Pion, London.

Roberts, E. (1996).Place and spirit in public land management, in: Driver, B. L. et al. (Eds) Nature and the Human Spirit, p. 61-80 (State College, PA: Venture Publishers).

Shamai, S. (1991) .Sense of place: an empirical measurement, Geoform 22, p. 347-358.

Stedman, R. C. (2002). Toward a social psychology of place: Predicting behavior from place-based cognitions, attitude, and identity.

臺灣大學學術期刊資料庫

Environment and behavior, 34(5), p.561-581.

Stedman, R. C. (2003a). Sense of place and forest science: toward a program of quantitative research, Forest Science 49, p.822–829.

Manzo, L. C. (2005). For better or worse: Exploring multiple dimensions of place meaning. Journal of environmental psychology, 25(1), p.67-86.

Jones, C. D., Patterson, M. E., & Hammitt, W. E. (2000). Evaluating the construct validity of sense of belonging as a measure of landscape perception. Journal of Leisure Research, 32(4), p.383-395.

Shumaker, S.A, Taylor, R.B. (1983). Toward a clarification of people–place relationships: a model of attachment to place. In Environmental Psychology: Directions and Perspectives Feimer NR, Geller ES (eds). Praeger: New York; p.219-251.

Semken, S., & Freeman, C. B. (2008). Sense of place in the practice and assessment of place-based science teaching. Science Education, 92(6), p.1042-1057.

Williams, D. R., M. E. Patterson, J. W. Roggenbuck, and A. E. Watson (1992).“Beyond the Commodity Metaphor: Examining Emotional and Symbolic Attachment to Place,” Leisure Science, 14, p.29-46.

Williams, D. R., & Vaske, J. J. (2003). The measurement of place attachment: Validity and generalizability of a psychometric approach. Forest science, 49(6), p.830-840.

Williams, D. R. & Roggenbuck, J. W. (1989). Measuring place attachment: some preliminary results (Abstract),in: Proceedings of the National Recreation and Parks Association Symposium on Leisure Research, 1989 (San Antonio, TX (October, 1989)).

臺灣大學學術期刊資料庫